〈告白〉の現代
—川端康成の『眠れる美女』を通して—

春木　奈美子

1．『眠れる美女』

本論文でとりあげる川端康成（1899－1972）の『眠れる美女』（1961）[1]は、『伊豆の踊り子』（1926）や『雪国』（1926）などの初期の清冽な代表作品とは幾分趣を異にした作品である。そこには、それ以前の作品にはみられなかった性と死の芳香が息苦しいまでに立ち籠めている。この作品の誕生を巡るひとつの逸話を挙げておけば、作者川端は『眠れる美女』が出版された４ヶ月ほど後、睡眠薬の禁断症状を発し、数日間意識不明の状態に陥ったという。この出来事は、この作品が作者の内的作業とその深部において複雑に絡み合っていることを図らずとも証しているようにも思える。『眠れる美女』が残していった、あまりにも長すぎるその眠りのなかで、川端は一体どんな作業をおこなっていたのだろうか。作品の内と外との複雑な折り返しを詳細に辿ることは不可能だとしても、60 歳を越え老いに差し掛かりつつあった川端自身の切迫した内的作業と同期するようなかたちで、普段は押し隠されたものが思わずパトスを宿し、この作品が産み落されたということは言っておいてよいだろう。川端曰く「構想をたてることなく」[2]作品となった『眠れる美女』は、おそらく作者自身にとっても、性や死の暗号であり続けたのかもしれない。然れば、川端自身がこの作品を好んではいない旨を告白していたとしても[3]、それは驚くに足らないのである。この作品に散りばめられた暗号の意味を享受できたのは作者でなく、むしろ読者のほうであった。その筆頭には無論、三島由紀夫の名を挙げねばならない。川端とのある種の師弟関係にあった三島は、数ある川端の作品のうちでもとりわけ『眠れる美女』を好み、この作品に最大の讃辞をおくっている[4]。では、あの三島をして「真の退廃の横溢」と言わしめた、この小説をさっそく紐解いていこう。その内容を要約するならば、おおよそ以下のようになる。

岩を砕く波音が響く海辺に、昼間は門を固く閉じた一軒の屋敷がある。これが「安心できるお客さま」を迎え入れる「眠れる美女の家」である。真紅のビロードのカーテンをめぐらせた屋敷の一室には、年端もない娘が一糸纏わぬ状態で眠っている。淡い灯り

のなかで眠る美しい娘との一夜を過ごしに、「すでに男ではなくなった」老人たちが、この秘密の家を訪れる。夜更けに、この屋敷の門を開き、客を迎え入れる女主人が、翌朝には、客を見送り、その門を閉じる。老人が訪れてから帰るまでの間、深く眠らされた娘が目覚めることは決してない。つまり娘は、そこでの出来事（誰が訪れたのか、何が起きたのか、あるいは起きなかったのか）を知ることはない。とはいえ、文字通り「眠る」という以上のことがあってはならない。これが眠れる美女の家の「掟」である。それゆえ、この家の女主人はきっぱりとこう言い切る――「この家に悪はない」（p. 82／73）と。

この秘密の家のことを聞き知っていた主人公江口老人は、ある日、ふとこの家を訪れる。眠れる美女の家で過ごすはじめての夜、江口は、隣に眠る娘の初々しくすべらかな肌に触れる。しかし江口の胸の高鳴りとは裏腹に、深く眠った娘の方は、こちらに何ひとつ応えてこない。けれども代わりに愛撫する娘の身体の細部にからは、忘れていたはずの過去の断片が次々と甦ってくるのである。若かりし日の恋人との逢瀬、結婚後の愛人との夜、嫁ぎ行く娘とのふたり旅･･･娘の裸身をなぞるように紡がれていく記憶の糸を一人たぐりつつ、江口はやがて夢におちていく。美女の眠りに囲われながら記憶と夢の繭にくるまれる夜の体験は、奇妙な魅惑となって江口を再びこの家に引き寄せる。こうして江口は、この宿に通うようになる――ある決定的な出来事が生じるそのときまでは。

寒さの厳しいある冬の日、この日も江口は眠れる美女の家を訪れていた。ただこの夜は、江口のために「二人」の娘が眠らされていた。両脇に娘を抱くようなかたちで眠りに落ちた江口が見たのは、少年時代に亡くした母の夢であった。

新婚旅行から帰った江口が戻った自宅には赤い花が家を埋めるように咲いている。江口はそこが本当に自分の家かとためらいつつも、死んだはずの母の迎え入れるその家に入っていく。家の縁側から何気にその赤い花を眺めていると、突然赤いしずくがこぼれ落ちる。剥き出しの形で現れたこの「赤」は夢見手江口を切迫し、ここで夢が破れる。

こうした不可解な夢からさめた江口は、不意に一方の娘のほうへ寝返りをうつ。すると、娘の体は冷たく、息すらしていない。慌てた江口は、すぐさま女主人を呼びつける。狼狽する江口とは対照的に、女主人は冷静な手つきで死んだ娘を屋敷の外へ運び出そうとする。どっしりと重い娘の死体、手を貸そうとする江口に、女主人はいつもの落ちついた調子で、こう応える――「余計なお気遣いをなさらないで、ゆっくりおやすみになってください。…娘ももうひとりおりますでしょう」。このとどめの一言は、江口の（加えて読者の）生の緩慢に区切りを入れるものとなる。そして物語はここで閉じる。

数々の人類学的資料が示してきたように、歓待において客人に女性が供されることは稀ではないものの、眠れる美女の家で差し出される娘は、そうした女性とははっきりと区別される位相にある。というのも、深く眠った娘は男性の要求に直接応じることはも

ちろん、言葉をこちらに発することも、また視線をこちらに投げかけることすらないからである。この意味で、女は老人に何も与えない。しかし、それでもやはり、ここにもあるひとつの〈贈与〉が存在しているように思われる。本論が掬い上げようとするのは、こうした次元における〈贈与〉という出来事である。

このような展望のもと、本論は、素朴な意味における歓待の破綻状態とも言える眠れる美女の家での「歓待」の構造を、レヴィナス-デリダの歓待についての論考を参照しつつ描き出していく。この作業は同時に、手厚いお持てなしとはおおよそ形容し難い精神分析の内実を逆照射することになるだろう。論を進める前に全体の構成を確認しておけば、まず第２章において、眠る裸身の美女というモチーフから、老人に開ける特別な時空間の出現を、〈贈与〉の可能性の条件として確認したうえで、続く第３章では、老人江口が夢のなかでイメージの立ち現れに出会う瞬間に、〈贈与〉という視点をもって接近する。第４章では、ここまでの考察を精神分析臨床に翻し、第２章での眠れる美女の考察を分析における転移空間の現れとして捉え、更に宿を取り仕切る女主人に分析における区切りの機能をみながら、晩年ラカンが提唱した短時間セッションに触れ、臨床における歓待の構造を示し結びとしたい。

ではここから、問題含みな〈贈与〉をその内に孕んだ『眠れる美女』の歓待の森へと分け入ろう。

２．愛撫と死

「ああ。」
江口の声が出たのは、深紅のびろうどのかあてんだった。
…幻のなかに足を踏み入れたようだった　(p. 15／18)

娘が眠る部屋に一歩足を踏み入れたその瞬間、江口は思わず声をもらす。深紅のビロードのカーテンの中へと、あたかも「幻」の中に誘い込まれるように入っていく。美しい娘の無言の誘惑を受け、老人は娘の肌に触れる。しかし隔たりを埋めようとするあらゆる行為がそうであるように、そうした行為は逆説的にも隔たりを更に意識させることになる。どれだけ接近しても、そこにはなお差異がある。あるいは接近すればするほど踏み越えられない差異がある。それでもしかし、愛撫は飽くことを知らない。あの愛撫のもどかしさが、愛撫する者をさらなる愛撫へと駆り立てるのである。

限度を知らない愛撫は、まぎれもなく「現前」するものをひとつの「不在」としてさがし続ける「焦燥」だとレヴィナスはいう。愛撫において、肌のなめらかさを、肌のぬくもりを感じとることはできるだろう。しかし「愛撫」において求められているのは常に「それではない」あるいは「それだけではない」というのである。息のかかるほどの近さにある娘は触れられているようで、決して触れられてはいない。愛撫を通して得ら

れるのは、相手の現前ではなく、むしろ不在なのである。女はみずからの否定によって、無言のうちに存在の重みを反響させる。

> 「まるで生きているようだ」とつぶやいた。生きていることはもとより疑いもなく、それはいかにも愛らしいという意味のつぶやきだったのだが、口に出てその言葉が気味の悪いひびきを残した。(p. 17／20)

愛撫のさなかに、ふとその相手が「生きていること」に気づくということは、愛撫する手が触れようとしていたものが、死であることを教えている。ここから、眠らされた娘というのが、もはや男でなくなった老人の惨めさを相手に知られることなくひとり喜悦に浸るための遊具であるという、平板な理解は棄却される。むしろ娘が眠りという死の隠喩の中に置かれているという状況そのものが、老人を惹きつけてやまないのである。つまり愛撫するその手から零れるのは、死に行く他者である。愛撫が到達しないのは、こちらの手に決して届かないところに他者の死がまちうけているからである。死へ落ち込む他者に追いつくことはできない。江口老人は、裸身の娘に、エロチックなものに昇華されない死の気配を無意識のうちにかぎ取っていたのである。「まるで生きているようだ」と奇妙な響きを残したこのつぶやきの後もなお、江口は傍らの娘を「生きた人形」のようだと感じる。眠った娘は、死んだふりをした生体ではなくて、生きたふりをした生体ならざるもの、つまり生きた死体という不可能な位置にある。この生きた死体は、愛情を注いだことさえ忘れていた、幼い日の夢中になって遊んだあの玩具のように、怪しく鈍い光を放ちながら、静かにこちらを誘惑する。ここからネクロヒリアまでの距離も、そう遠くはない。

ところで、眠れる美女の宿には、いくつもの贈与が折りこまれている。まず第一に、娘は少しも与えていない（見つめる視線、話す言葉の不在）。一方で、娘は法外なほどに与えている（一糸纏わぬ裸身の現前）。そして死の形象ともいえる魅惑の裸身を通路にして、老人には特別な空間が開かれる。それは、なめらかに過ぎ行く日常の連続にはない「時間」であり、「場」である。あるいは時空間の分節化の手まえにあるような、液化した時空間と言えるかもしれない。眠れる美女の家で、そうした「時間なき時間」、「場なき場」が老人に開かれている。更に、老人はそこに身を委ね、液化してゆく。眠れる美女の眠りに囲われるようなかたちで、老人は、この場ならぬ場に「自らを与える se donner（身を委ねる）」のである。こうして開かれる不分明領域に、老人は予期せず、しかし抗いがたい力によって、誘われていく。以来、老人は、眠れる美女の家を訪れては、遠い過去にまで、記憶や夢のイマージュの海を漂流する。江口老人は、カーテンの向こうへと歓待の一歩を踏み出したのである。

ただし注意しなければならないのは、これらの出来事が差し出されたものを受け取り、それに返礼するというような互恵性を軸に循環しているのではない、ということである。

娘が無防備に裸身をこちらに差し出していたとしても、眠る娘には、自身の身体を供しているという意識はない。つまり老人の慰めのために自己犠牲的に体を差し出しているわけではない。そして江口のほうも、娘の裸身との直接の交わりではなく、娘の眠れる裸身を契機に拓かれた「液化した時空間」へと自らを捧げている。つまり、それは差し出されているものに対する反対贈与の性質を一切備えてはいないのである。従って裸で夜を共にする二人であっても、そこにはいかなる意味においても融合はない。

与えないことで与えられた、この「アトポスな場」は、そもそも娘の裸体を媒介として、はじめて開かれた次元であった。この媒介項としての裸身に注目してみると、それは二重の役割を担っていることがわかる。確かにはじめ江口は、娘の体を口や手で弄んだ。つまりそれは端的に「侵しうる」エロス的身体であった。しかしそれは、だからこそむしろ、決して「侵しえない」無言の身体であった。身体が、見られることに無関心であり、単に示されるものとなるときはじめて、それは媒介として機能する。デリダは女性性を、単なる侵しうるものでありながら、秘密としては侵しえないものであると言ったが、こうした「侵しうる侵しえないもの」(5) という女性の二重性は、愛撫という行為のなかで端的に露わになる。眠れる美女への愛撫は、深層において死に触れている。そして愛撫を契機に、老人は歓待される客の位置から滑り落ち、歓待する者となる。娘の身体の内奥に潜む未だない死を蝶番にして、歓待の主体が反転するのである。

3．歓待の一歩＝歓待の否定

ある冬の夜、眠れる美女の家を訪れた江口は、ふたりの娘—白い肌の娘と黒い肌の娘—が眠る部屋に、迎え入れられる。美しく輝く白い肌をした娘の腰のくぼみを抱いていると、老人の脳裏に、この娘を「一生の最後の女」にしてやろうという思いがよぎる。「この家の掟を破って、老人たちの無念を晴らしてやろうか」、そして、「そのほうが、娘にとってもよほど人間らしい付き合いではないだろうか」—こうしたやや英雄がかった考えを巡らせているうちに、自分にとっての「最初の女は誰だったんだろうか」(p. 110／94) という問いが、頭を擡げてくる。「母だ」とひらめいた瞬間、先の血の逸る勢いのようなものは止んでいた。

目の前の、「生きたような」娘にかわって、今度は死んだ母のイマージュが、不意に江口を襲来する。江口が 17 歳の冬の夜、結核で血を吐きつつ死んでいった母の臨終の記憶である。そのあと眠りに落ちた江口は、この母の夢を見る。死んだはずの母が、新婚旅行から帰ってくる江口夫婦を、家に迎えいれようと戸口に立っている。しかし江口は、母が出迎えるその家に入るのを一瞬間ためらう。

> 家に帰ると赤いダリアの花が家をうずめるほどに咲きゆれていた。
> 江口は自分の家かと疑ってはいるのをためらった。

「あら、お帰りなさい、そんなところでなに立っているのよ」

(pp. 112-113／96-97)

近しいはずの家が、不断に江口を疎外してくるのは、家（Heim）に関わるものすべてが、認識の網の目を通っていたわけではないことを示している。秘密（Geheimnis）に属するものは、この篩（ふるい）を通らず、不気味な（unheimlich）なもののままなのである。しかしこの不気味な家こそ、死んだ母のいる家こそ、居心地の悪い家こそ間違いなく江口の家なのである。自分が死んでいることさえ知らないような母に手招かれ、おそるおそる家に入った江口は、家を囲うように咲く赤いダリアに目をやる。すると、

一枚の花びらから赤いしずくがおちた。「あっ？」(p. 113／97)

夢の中に突然あらわれた、不気味な「赤」の異常な接近は、夢見るもの（主格）が、見られるもの（対格）に還元されるような切迫した瞬間となる。ダリアの「赤」が不可解な質感を剥き出しにして、血のようにしたたり落ちたとき、夢が破られたのである。

通常、ものが意味をもつということは、単にそこにある以上のものであるということをいう。しかしこの「赤」は、みずからと解きがたく密着し続け、みずからといかなるズレをも示さず、したがっていっさいの表象的意味を剥奪されている。それ自体一滴の意味も分泌しない裸形の赤が触れてくること、つまり表象的身分とは異なる次元で、イマージュそのものの立ち現れる仕方が問題となっている。この立ち現れに出会ってしまうことは、オオカミに見つめられるあの男の夢が教えるように、それ以上ないほどに底知れない恐怖となる。視野にあってはならないものに見られた者は、硬直を余儀なくされる。

視野のなかに通常欠けているものとは、見る者の眼差しに他ならない。通常、このひとつの消失点が、中心点となってはじめて視野が構成されている。しかしこの視野に、あり得ないはずの眼差しが現れるとき、今度は、見る者が視野のなかに還元され固く硬直することになる。ここでは、表象世界のはじまりの一点が、赤い花に囲まれた家、あるいは深紅のカーテンに囲まれた部屋といった母胎内の隠喩のなかに、息づいている。世界と私との接続点、生の起点が、女性の身体というトポスを間借りして現れる。しかしこの現れに立ち会うことは構造的に不可能である。はじまりは常に既に過去として、しかしこれまで一度もなかった過去としか存在しえない。見る者の位置を奪われた主体は、夢の外に追い出される。はじまりとわたしは常に出会い損なうのである。

このような恐ろしい夢から江口が目覚めると、夢が囲う現実が、外的現実をも浸食する。「死んだ母」の夢から目覚めると、今度は自分の隣で娘がまさに死んでいるのである。恐怖としか言えない夢も、それが願望充足であるとすれば、その夢が閉じたのは、

目醒めて見る外的現実よりも更に外傷的な「現実」が夢の背後にあるからだと考えることができる。夢がそれ以上見せなかったおぞましい「現実」から逃れるためにこそ、夢は閉じ、夢見手を目醒めさせたのである。夢がイマージュのベールをかけることのできなかった、決して表象されない「現実」、起きて目にする娘の死という外的現実よりも、もっと恐ろしい「現実」が、表象の切れ目から一瞬間、ありえない顔をのぞかせたとき、目覚めがもたらされたのである。

完全には出会われることのない、夢の向こうの「現実」は、母と子のなにほどか悲劇的な、しかし決定的な出会い損ないに関わっているのだろうか。長患いの母の腕は、骨だけだったが、握る力は、江口少年には痛いほど強かったという。母は、そうして、江口少年の名を切れ切れに二度呼んだあと、多量の血を吐いて死んだ。母が息子に何を訴えようとしたのかはわからない。その夜が江口に残していったのは、母の指の刺すような冷たさだけであった。最後の女として娘の処女を犯そうと夢想し、最初の女としての母のイマージュが回帰した後に運ばれてくる夢は、やはり血の赤によって破られる。眠る美女が駆り立てる愛撫の強迫と、死に行く母に無言で呼びかけられる強迫。死が性の衣を脱いで、死の床で無言に呼びかける母と、今宵眠れる美女の家で無言に愛撫を誘う娘とが、ここで交わる。死という受け取りきれない贈与は、夢の中で形を変えて反復される。応答不可能な限り、この故なき責めは止むことはない。はじまりを可能にした死の痕跡は、拭い去されることはない。女主人によって跡形もなく運びだされる娘の遺体、そんな娘の一点の染みも残さぬ消失も、江口のうえに重くのしかかることになる。

このように、江口は性の中に漂う死の匂いに惹きつけられ眠れる美女の家に向かうが、最後には、死に取り残される。死は、誰ひとり追いついてくる者もいないほの暗い地帯と言える。それはわれわれを惹きつけると同時に跳ね除ける。深紅のビロードのカーテンの部屋にも、赤い花の家にも、歓待はない。パラシオスが描いたあの絵のように、カーテンの向こうには何もない。そこにはひとり進んだ主体がいるだけだ。デリダの表現を借りてこう言うことができるだろう。眠れる美女の家に、歓待への一歩 pas d'hospitalité を踏み出したとき、もはやそこには歓待はない pas d'hospitalité。歓待の歩みは同時に歓待の否定である。

4．眠れる美女と女主人、あるいは分析家

眠れる美女は、身体を無防備にこちらに差し出しつつ眠り続けることによって、老人を眠れる美女の家に繰り返し引き寄せた。そこで老人は、過去の記憶の断片に出会い、そのイマージュの海をおよぐような体験した。この美女と老人のやりとりならぬやりとりと、分析家とクライエントのそれとの間に構造的な一致を見ることができないだろうか。沈黙する分析家は、クライエントに、自由連想の場を拓き、過去と現在と未来の、こことそこの自由な隣接を可能にする液化した時空間を体験させる。「侵しえる侵しえ

ない」女性的存在（＝分析家）は、みずからを否定として差し出すことよって、客（クライエント）の秘められた内面を、無言のうちに反響させるのだが、クライエントの背後に身を置く分析家は、その不在の現前を実践している。いつまでも辿りつかない、あの愛撫のもどかしさに似た焦燥にかられ、江口老人が、眠れる美女の家の門を幾度も叩いたように、クライエントもまた、足繁く分析家のオフィスを訪ねる。分析の嚆矢ともいえる転移関係は、眠れる美女にも比す、黙する分析家の怪しい魅力によって構築されていく。実際、この小説自体も、当初は一話完結、つまり眠れる美女の家への一晩限りの来訪で稿を閉じるはずであった。

しかし、何ものをも把持しないという意味では、無益な戯れともいえる愛撫の単調な継続を、分析と呼ぶことはではない。既に見てきたように、眠れる美女の家の門が閉じられ、そこに区切りが入れられてはじめて、歓待は析出されるのであった。つまり歓待が歓待であるためには、―そして今やこう言っていいだろう、分析が分析であるためには―それが内側から自己否定されねばならないのである。変調をもたらすせき立てが必要となる。

ここで、この物語のもうひとりの登場人物を思い出してほしい。眠れる美女の家を取り仕切る女主人である。この家の門は、いつも彼女の手により開かれ、そして閉じられていたのであった。この意味でこの女主人もすぐれて歓待に関わる人物、すなわち分析家といえるのだ。

江口の隣で死んだ娘の亡骸を運びだす女主人は、静かにこう言いきる。

> 「お客さまは余計なお気遣いをなさらないで、ゆっくりおやすみになって下さい。娘ももう一人おりますでしょう。」(p. 115／98)

江口老人のみならず、読者をも宙吊りにする女主人の、最後のとどめの一言――突然に途切れる小説の終わり方は川端特有のものだが――には、分析における「区切り」の機能をみることができる。ラカンが提唱した「短時間セッション」という分析的句読法は、いわばクライエントの内的のテクストに区切りを入れるものである。終わりを告げる分析家の行為で分析セッションは、閉じられる。分析家の位置にある女主人の一言にせきたてられ、江口の液化した身体は時間と空間を取り戻し、ひとつ身体へと戻ってゆくだろう。そしてその身体は、もはやそれ以前の身体と同じとは言えない。

とはいえ、区切れに向かう時間の転調をもたらしたのは、厳密に言えば、分析家ではない。江口の場合で言えば、件の夢からの目覚めという身体的行為自体が既に、女主人のとどめの一言よりも一足先に、区切りをもたらしている。目覚めは確かに生理的な行為であるが、しかしそれは過去と現在を圧縮させるという意味で充分に言語的なものである。江口の身体に、不気味な対象（「赤」）が割り込んでくるとき、江口は受け取り切れないものに、〈他者〉の場で触れられるという不可能な体験をしている。死んだ対象

に触れられた瞬間、もはや人間は言葉をしゃべれない。その言葉ならぬ言葉を聞き取るのが分析家である。無言の声部である身体からの「せきたて」(夢からの目覚めの瞬間)を捉えた分析家だけが、そこに区切りを入れることができる。

みずからのうちに知らぬ間に懐胎されている不気味な対象を浮かびあがらせるこうした実践が、ラカンのいう短時間セッションである。短時間セッションは、切断という分析家の「解釈」行為によって場は閉じられるのではあるが、これは分析家がクライエントになんらかの解釈を与るというナイーブすぎる図式とは明確に区別される。というのも先に見たように、江口(=クライエント)が見た夢そのものが、女主人(=分析家)の一言より前に、すでに解釈なのである。よって、分析家とは解釈を与える者ではなく受け取る者をいう。受け取ると言っても、素材と理論とが奇妙に癒着したままの流産したマニスクリプトである患者の解釈の言葉は、柔和な受容的態度だけで感知できるものではない。クライエントの無意識の理論に従う、失敗した言葉を聞き取る分析家には相当に強度な態度が必要となる。転移空間を切り開く「眠れる美女」と、その空間に切れ目を入れる「女主人」の両方の性質を兼ね備えるとき、言い換えれば、分析家が死んだような人形でありながら、しかもある掟を持ってその場を司るものとなるとき、分析という歓待が析出される。

江口は、これまで一度も失われたことのない失われた対象がその語りの内面からあらわれてくるような場に身を投じ、実際、夢においてその対象に奇襲される。しかしこうしてもたらされる出会いは、奇妙にも再び失われるためにやってくる出会いである。すべての歓待の中心には、それ自体歓待的でない何かがある。これは、不可能な出会いという形でのみふりかかる何かであり、それは話す主体を奇襲し、脱臼させる何かとしてのみ現れる。歓待の糸がむすばれては、ほどけていくのは、このためである。その度ごとにクライエントは歓待の森を通り抜けていく。

こうした歓待としての分析のうちには、分析家の自己犠牲でも、クライエントの英雄的な身振りでもなく、非人称の次元の〈贈与〉がある。その時点では、差し出す側も受け取る側も、未だ非人称に留まるこのやりとりならぬこのやりとり、所与の連続性における断絶をもたらし、再編成に導くこの無言の語らいには、〈贈与〉としての語りという名が相応しいのではないだろうか。生後まもなく両親を亡くし、「家なき子」と自らを称する川端が、死を凝視する老年期になって書いたこの作品のなかで、主人公の衣を纏って試みたのは、かつて一度も体験されたことのない過去の復活であったのかもしれない。もちろん、この潜勢態としての過去の復活そのものが、病理学的次元に近接することは否定できないが、これまでの現実との結び目を更新する可能性もまたそこには開かれている。イマージュの立ち現れに出会う主体に宛てて、精神分析の扉はいつも開かれている。

注

(1) 川端康成（1961）『眠れる美女』新潮社、(=2004 “House of sleeping beauties”, Translated by Edward Seidensticker, Koudansha International.）なお以降、『眠れる美女』からの引用は（p. 日本語ページ番号／英訳ページ番号）と記す。
(2)「川端康成にきく」『三島由紀夫全集　補巻１』（1976）新潮社、318 頁。
(3) 前掲書 (2)
(4)『眠れる美女』に収められた「解説」で、三島はこの作品を「形式的完全美を保ちつつ、熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香を放つデカダンス文学の逸品」と絶賛している。
(5) Derrida, Jacques 2000 *Le toucher, Jean-Luc Nancy*, Galilée (=2006『触覚、ジャン=リュック・ナンシーに触れる』、松葉祥一ほか訳、青土社)

参考文献

Derrida, Jacques 1997 *De l'hospitalité*, Calmann-Levy＝1999『歓待について―― パリのゼミナール記録』 廣瀬浩司訳、産業図書。

Derrida, Jacques 1999 *Donner la mort*, Galilée＝2004『死を与える』廣瀬浩司ほか訳、ちくま学芸文庫。

Lacan, Jacques《Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse》 in *Écrits*, Seuil, 1966＝1972「精神分析における言葉と言語活動の様態と領野」『エクリ』宮本忠雄ほか訳、弘文堂。

Lévinas, Emmanuel 1961 *Totalité et infini*, Kluwer Academic＝2005－6『全体性と無限（上）、（下）』 熊野純彦訳、岩波文庫。